

4 文明開化と江戸上水

明治維新を経て、東京は近代国家日本の首都として新たに歩み始めました。

文明開化のかけ声とともに、欧米の諸都市を目標とした街づくりが行われました。新橋・横浜間に鉄道が開通し(明治5(1872)年)、銀座には煉瓦街が誕生して(明治6(1873)年)ガス灯が輝く(明治7(1874)年)など、東京の風景は急激に変化していきます。

しかし、地下を流れる水道は依然として江戸時代の神田・玉川上水のままでした。当時は浄水処理がほどこされていない河川水そのものが地下に埋設された^{せきひ}石樋・^{もくひ}木樋によって市内の上水井戸に配水されていたのです。

しかも、維新後の混乱で水道を所管する組織が変転し、上水の管理が一時おろそかになってしまいました。玉川上水路に通船を許可したり(明治3(1870)年~5(1872)年)、水道料金の徴収も行われなかったという時期(明治7(1874)年まで)もありました。

十分な補修も行われなかった木樋は腐朽し、水質は悪化しました。また、上水は自然流下で圧力がないため、火災の消火に威力を発揮することはできませんでした。

このため、上水の改良、特に鉄管による有圧水道の創設が求められるようになりました。

明治7(1874)年、政府は上水の改良の検討を始め、内務省土木寮雇ファン・ドールンに改良意見書や改良設計書を提出させます。

一方、東京府も明治9(1876)年、東京府水道改正委員を設置して、上水改良の方法や費用を調査し、明治10(1877)年に「府下水道開設之概略」としてまとめ、明治13(1880)年には「東京府水道改正設計書」も作成しました。

ファン・ドールンや東京府水道改正委員の設計は、いずれも原水を沈殿、ろ過して鉄管で圧送するというもので、東京近代水道の原形がここによく示されたこととなります。

しかし、近代水道の創設には巨額の費用を必要とし、また道路整備など都市計画全体との調整を図ることが必要なため、さらに検討を加えていくこととなりました。

東京府は、近代水道創設の検討を進める一方、既存の木樋、上水路の補修を行い、水源汚染の取締りを強化するなどして、飲料水の安全確保に腐心していました。

こうしたなかで明治 19 (1886) 年、コレラの猛威が東京を襲いました。それまでもしばしばコレラの流行はありましたが、この年は死者が 1 万人近くにも及ぶという事態で、加えて水源である多摩川沿岸でコレラの汚物流出騒ぎも起こり、上水の信頼は大きく揺らぎます。このことが近代水道創設促進に拍車をかけることとなりました。